

1人1台時代の

ICT活用

第8回

「1人1台」の活用

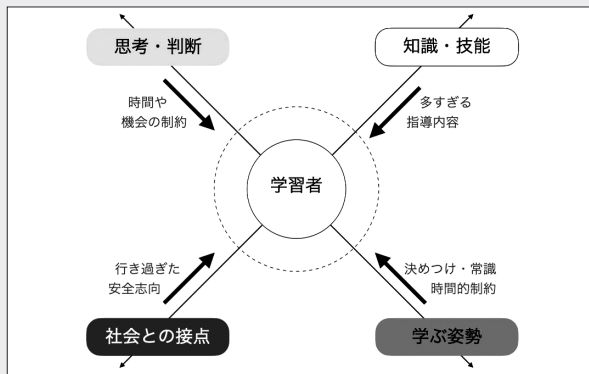
ビジョンを4軸観点で設計しよう

「1人1台」で成果を出すために必要なもの

近年、小中学校のGIGAスクール構想の影響もあり、高等学校の1人1台端末環境整備が進んでいる。この領域では私学が先行しており、筆者は7年前から1人1台のICT活用の支援や、他校への好事例の発信をしてきた。その中で目を見張る成果を出した学校もあれば、思うように効果が出ない学校もあった。その大きな分岐点が「1人1台端末で何を實現するか」というビジョンの有無であった。公立・私立を問わず、ビジョンが明確だと成果が出やすい。だが、ICT

野本竜哉 ((一社) i O S コンソーシアム代表理事)

図1：4軸の伸ばすべき力とそれを阻む要素



学校は「格差の是正」に貢献

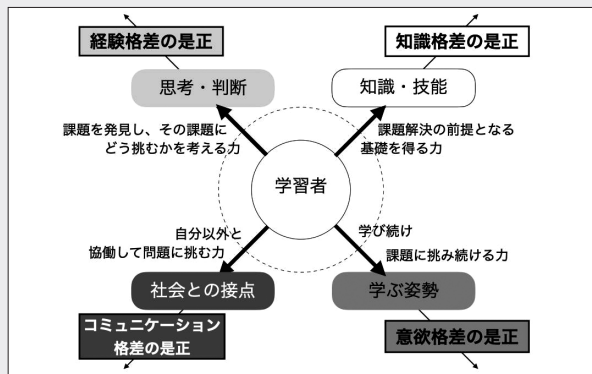
や1人1台で何ができるかがよくわからない中、ビジョンの設計は難しい。そこで本稿では「学校の役割」から1人1台で實現すべき姿を設計するための「4軸思考」を紹介する。

学校の役割として筆者は右の見出しのような考えを持っている。これは学習指導要領や様々な学校の教育方針を咀嚼した結果、図1に示すような4軸をバランスよく育成したいという考えに行き着いたからだ。

一方、図1に示すように、実際には様々な制約が逆ベクトルとしてスキル伸長の壁となる。これを乗り越えることができれば、学校は入学時に個々の生徒が持っている差を埋めること、つまり「格差の是正」が可能になると言える。

図1に少し要素を書き加えた図2では、4軸を伸ばすことで、①知識の格差、②経験の格差、

図2：4軸の力を伸ばすと是正される可能性がある格差



こそが学校の最大の価値・役割であると考えているからだ。「意欲の格差が最も深刻」と話すのは、株式会社リディラバの安部敏樹代表だ。筆者はこれを重く受け止めており、学習・学校生活・進路選択等に「意欲」を持つには、本人や家族だけの努力では難しい。さらに④のコミュニケーション力は①～③の複合的要素である上、人が集わないと育成機会が得にくい。故にこの2軸の伸長機会担保が極めて重要だ。

4軸の育成にどう「1人1台」を活かすか

ここでICTの活用ビジョンの話に戻そう。有限な時間を

③意欲の格差、④コミュニケーションの格差の是正が期待されることを表現した。このうち③と④は家庭や学校以外の教育機関で実現するのが難しいと筆者は考える。多様な人と人が集い、互いに刺激し合うことが意欲やコミュニケーションの出発点になることが多々あり、これ

どこに注力すべきかを考える時、①や②は、ある程度ICT活用により担保できる技術がある。ならばここをICTに頼り、捻出した時間を③や④により多く割く戦略が描ける。例えば、1人1台で身近になるAIDRIL活用で①の一部を実現、思考ツールや協働学習ツールによる学び合いで②の訓練し、ARやVRを用いた仮想体験、豊富なWeb上の資料調査とその取りまとめ活動等から（実体験には及ばないものの）経験・体験機会を補完する、等だ。

ただし、教員がこれらのICT活用事例を完全掌握する必要はない。多くの生徒は教員よりICT活用に長けており、大抵クラスに数名はICTフリークがいて、自然にノウハウが共有されるからだ。成果を上げている高等学校では、教員も知らない手法で想像以上の成果物が出てくる事例が多い。よって、教員は提出期限と方法程度を指示し、教科目線での支援と成果物の評価、生徒の工夫や鋭い視点を「賞賛すること」に徹すればよい。こうした授業設計だと生徒が動いたり他者から情報を得たりする必然性が生まれ、意欲やコミュニケーション力醸成も期待できる。

このように本稿で紹介した4軸を意識した「ありたい姿」を検討すれば、その実現に1人1台のICT活用シーンが見えてくる。しかも、先行する私学が無償で使えるツールや事例を多く残してくれている。ぜひ、学校の方針や現状の課題を踏まえ、御校ならではの活用ビジョンを設計してほしい。



（一社）ICT CONNECT 21 ―「教育の情報化」に関係する皆さまにオープンな場を提供し、コネクトすることで教育を良くしていく団体。教育とICTについての情報を毎週メルマガで配信中！